

文殊菩薩の信仰を巡って

スダン・シャキヤ

いうまでもなく、文殊はサンスクリット語「文殊師利」に由来する言葉である。ただし、文献において妙音、金剛利、法界語自在、文殊金剛など様々な名号で呼ばれている。文殊菩薩は学問・智慧を司る尊格として仏教徒にとって観音と共に親しみやすい尊格であり、仏教が広まっている各国・地域によってその信仰にも多様性が認められる。その中で、右手で剣、左手で典籍を持っている文殊はオーソドックスな姿である。「三人よれば文殊の智慧」ということわざが日本では日常会話等で用いられているほど、文殊はなじみ深い尊格である。また、中国の山西省の五台山は文殊信仰の聖地として古くから知られている。興味深いところに、その中国からやってきた文殊が現在のカトマンズ盆地を造ったという伝説がネパールに伝わっており、文殊は「創造神」としても信仰されている。さらに、この菩薩は起源が異なるものの、学問・技芸を本質とする弁財天と同一視されることも注目に値する。

文殊は原始仏教では現れずに、大乘仏典において活躍する純粋な大乘菩薩である。この菩薩は『法華経』のように初期の大乘仏典に眷属の一員としてすでに登場している。また、『仏説阿闍世王経』では文殊は既に仏道を完成したもので、諸菩薩の父母として説かれている。このように、文殊のその位置は智慧を本質とする菩薩から向上し「仏・菩薩を生み出す親」にまで至ることが明らかである。

密教経典においても大乘仏典と同様に、文殊は眷属の一員から次第に上首の菩薩となり、最終的に「本初仏」として解釈されているのである。その中で八世紀頃に成立した密教経典『ナーマサンギーティ』では、文殊を最も頂点に置き、八百にのぼる種々の名号をもって賞讃されている。「本初仏」はその名号の一つであり、すべての仏菩薩の根源として解釈される。このように、密教文献において、文殊菩薩は、仏智または智慧を象徴する尊格としてだけでなく、悟りに導く尊格としても解釈されている。

そこで、本発表においては、『ナーマサンギーティ』をはじめとし、種々の立場から著されたその註釈書と共に『スヴァヤンブー・プラーナ』のような文殊に関する文献を用いて、密教における文殊の性格を解明したい。さらに、それは文殊の信仰としてどのように反映していたのかについて考察する。

キーワード:

文殊信仰、密教、『ナーマサンギーティ』、『スヴァヤンブー・プラーナ』